様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６９０
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１３４１４

研究課題名（和文）南原繁を中心とする比較思想史研究：戦前の官僚経験・戦中の社会科学研究・戦後改革

研究課題名（英文）Nanbara Shigeru (1889-1974) and the Intellectual Field between Prewar and Postwar Japan: A Comparative Study

研究代表者
川口　雄一（Yuichi, Kawaguchi）

創価大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：１０７５６３０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦前に官僚を経験し、戦時期に政治哲学を確立し、戦後改革に従事した南原繁を追究すること、彼の思想を軸として、同様の経験をもつ他の思想家を比較することを目的としている。より具体的には、軸となる南原を対象として、①戦時期の思想・哲学がどのようなものであったか、②戦前の官僚経験のなかでも、富山県射水郡長時代のそれがどのようなものであったかを明らかにしていく。
その成果として、①学者として南原が刊行した文献を、戦前版・戦時版・戦後版を相互に比較し、戦時期の政治哲学に固有の意義を明らかにした。また、この点に関して他の思想家との比較を進めた。②射水郡長時代の南原の言動を詳しく明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果の学術的意義・社会的意義は、第一に、従来の研究が提示した南原繁の政治思想のイメージとは異なったものを新たに提示したことである。南原の政治哲学は必ずしも確固としたものでなく戦前・戦中・戦後の間で揺れ動いたのであり、「洞窟の哲人」という内向きのものではなく他の思想家との対決を通じて生み出された面をもっていた。第二に、意味郡長時代の南原について後年の彼が語り残していなかった政治理念を明らかにし、後年の政治哲学、戦後改革にいたる思想形成の過程として新たな側面を提示した。なお、当時の国内政治情勢や郡情勢と共に追究したため、政治史・郷土史の面でも一定の寄与をなし得る。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to pursue Shigeru Nanbara, who became a bureaucrat in pre-war Japan, studied political philosophy as a scholar during the war and was one of the leaders of post-war reform. Comparisons will also be made between Nanbara's thought and that of other thinkers of his time. In particular, research on Nanbara will address two questions: (i) what were his philosophy during the war, and (ii) what were his experience during his pre-war period as head of Imizu County, Toyama Prefecture?
The results of the study revealed the following. (i) The discourse of Nanbara's political philosophy was compared before, during and after the war, and the significance inherent in his wartime political philosophy was clarified. In this study, Nanbara's thought was also compared with that of other thinkers. (ii) The study clarified in detail Nanbara's words and deeds during his time as head of Imizu County.

研究分野：日本政治思想史

キーワード：南原繁　内務省　牧民官　自治　労働組合法案　新カント派　戦後改革

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究の背景は、従来の南原繁研究の知見を中心とする次のような課題意識があった。第一に、従来の研究に従って、1930 年代（戦時期）に確立されていく南原の社会科学研究（より核心的には政治哲学）の内容と特質とを認識していくことである。この場合、従来の研究は彼の最晩年に刊行された『南原繁著作集』全 10 巻に依拠してきたが、検閲等にも配慮された当時刊行の版によってその意義、特質、変遷を認識していくことが課題とされる。

第二に、そのような政治哲学を成り立たせた背景として、戦前期の彼の官僚経験、そのなかで進められた思想形成の過程を認識しなければならない。この点を扱った研究は従来僅少にとどまり、殊に、南原の官僚期の核心部分にあたる富山県射水郡長時代の全貌・詳細は十分知られていなかった。これを明らかにするための手がかりが富山県にあることは知られている。そこで、現地へ行き、資料調査のうえ、事実確認とそれに対する考察とが課題とされる。なお、南原の思想形成に関する研究という点では、官僚に就く以前の彼に対する認識も同様のものであって、戦前期の南原の思想形成を理解するうえで、その前提を遡って検証し、彼が幼少期を過ごした香川県への資料調査、事実確認といったことも重要な課題となり得る。

第三に、上のような官僚経験から政治哲学の形成を経た南原が携わった戦後教育改革の理念を認識しなければならない。この点について従来の研究は、戦後初期の南原の業績として断片的に取り上げ評価することはあったが、戦前・戦中の彼の思想の形成・展開の過程と関連づけた把握という点では、未だ不十分と見なされ得る。上記の２つの課題に取り組む先に、戦後改革に含まれた南原の思想を理解していくことが求められる。

なお、上のような時代経験や精神形成は、必ずしも南原だけのものとはいえない。彼の同世代には、大学卒業後に官途（または実務の世界）に進み、そこから学問（主に社会科学）の世界に移って、時局と緊張関係をもちながら研究に取り組み、戦後改革に積極的に関与した者が少なくない。同時代において各分野の学問を代表する主な人物として、大内兵衛、高木八尺、田中耕太郎、河合栄治郎、矢内原忠雄が挙げられる。そうした学者・思想家の政治思想や時代経験を南原のそれと比較することにより、南原の思想的個性をより明確に認識していくことが期待される。

２．研究の目的

本研究は、戦前に官僚経験をもち、戦時期に社会科学研究を進め、戦後改革に従事した知識人の政治思想を、南原繁を中心に比較・検討、その思想史的意義の究明を目的とするものである。この場合、比較思想史的研究の前提には、南原の思想の究明が据えられる。比較思想史的研究の軸は南原に求められるからである。また、南原の思想を究明するうえでは、戦後の思想の前提条件を戦中のそれに求め、同様に、戦前のそれに求めなければならない。すなわち、相対的には、戦前・戦時期の南原の思想を究明することが優先される。

より具体的には、第一に、戦時期の思想・哲学がどのようなものであったかを明らかにしていく。その内容は、一方において、戦前の官僚経験の先に南原が行き着いた先を意味する。戦中に確立された理論体系は、試行錯誤を含んだ戦前の経験と思想との意味を見定める際の基準となるからである。また他方において、戦後改革の思想的立脚点が戦中期の理論体系に認められる。更に戦時期の思想・哲学に関する南原の著作は、『南原繁著作集』等の既刊文献にほぼ確認できる。

第二に、戦前の官僚経験のなかでも、富山県射水郡長時代のそれがどのようなものであったかを明らかにしていく。当該時期の南原に関する一次資料がほとんど知られておらず、知られている限り資料は富山県でしか得られないという困難性がその背景にある。なお、官僚としての南原は、その郡治の他に、労働組合法案の作成等にも携わっているが、彼がもっとも望んでいた仕事は、「牧民官」とも称されていた郡長のそれであった。したがって、郡長時代の南原の思想には、官僚時代のなかでもっとも積極的なものが認められるはずである。

以上のことを主たる目的として設定し、研究・調査に伴う認識の内容によって、南原における戦後改革の思想的意義の究明、他の人物との比較研究、あるいは更なる調査（香川県等への資料調査）を進める。

３．研究の方法

本研究のなかでも南原研究の全般に関して、『南原繁著作集』所収の諸作品を網羅的に依拠することは共通している。そのうえで、大きくは、上記の目的に即して２つの方法を用いる。第一に、戦時期の南原の政治哲学の内容・特質を明らかにするため、戦後の『著作集』に先立

つ初版ないし初出の作品を調査し、その内容を確認することである。更に、初版ないし初出の内容を、その後の版の内容と比較することで、改訂に伴う変化を通じて、戦時期に固有の思想・哲学の意義を明らかにする。

第二に、戦前の射水郡長時代の南原に関しては、富山県へ赴き、一次資料を調査、究明する。発見できた資料は、それに対する解析の内容を解題・補注とした付して、本文を翻刻、他の研究者等と共有する。更に、射水郡長時代の南原が抱いていた政治理念やその後の政治哲学の確立に通じる形成過程について考察を加え、明らかにする。なお、この研究・調査の状況に応じて、香川県への資料調査、また他の思想家に関する資料調査等も実施する。

なお、本研究は開始１年目にコロナ禍に遭ったため、当初の研究の見通しが立たない事態がしばらく続いた（特に上記２点目の出張調査）。これにより当初の計画遂行が困難になった期間は、適宜、必要な資料を蒐集、解析を進めたが、特に官僚時代の南原が熱心に読んだとされる文献を読み解くことを試みた。この南原の読書経験は射水郡長に着任する前の時期に当たる。すなわち、この研究方法は、その後の官僚時代や学究時代に通じる南原の思想形成過程を明らかにし得るものとして試みたものである。

他の思想家との比較思想研究に関しては、主に以下の２つの方法を用いる。第一に、当初予定していた人物たち（上記）に関しては、各々の自伝的文献を解析し、官僚時代に至るまでの経験・出来事を整理し、南原と比較を進める。第二に、官僚時代の南原について調査を進めるなかで、その思想内容を理解するうえでも重要な人物が他にいたことが明らかになった場合、これらの人物について調査、文献蒐集、文献解析を鋭意進める（詳細は下記の(3)参照）。

４．研究成果

以下では、(1)刊行物等によってすでに発表された成果、(2)資料調査によって得られた認識（主には現時点で未発表だが、概ね原稿が完成している成果）、(3)研究・調査の途中にあるもの（今後研究を継続し、成果として見込みのあるもの）に分けて述べる。なお、以下の成果は、研究継続中のものも含めて、これまで適宜、南原繁研究会等で口頭発表を行い、研究協力者等との間では情報や知見を共有・交換している。

(1)刊行物等

まず、戦時期の南原の政治哲学の内容を明らかにしたものとして、『南原繁　「戦争」経験の政治学』（北海道大学出版会、2024 年 3 月）を刊行した。同書の知見によって、南原が学問の世界に移った 1920 年代末の時点で、価値哲学を核にもち「共同体主義」に立脚する彼の政治哲学がどの程度まで形成されていたのか、そしてこの政治哲学が 1930 年代の「戦争」経験を通じてどのような意味をもち、戦後初期にはどのように変化ないし発展していたのかを明らかにした。

また、南原が官僚期に読んだとされる B・ラッセルの政治思想と後年の南原の政治哲学とを比較する形で、戦前期の南原の思想形成に関して考察を加えた（「第一次世界戦争期における B・ラッセルの政治哲学と南原繁」2022 年 6 月）。この知見については、上記の通り、コロナ禍による一時の方針変更から生まれたものであり、引き続き再検討の余地が残されている。

なお、下記(2)に示した資料等を用いて、主に射水郡長時代の南原の政治理念に政治思想史的考察を加えた論文を現在まとめている（2025 年刊行予定）。この考察を通じて、南原の政治思想において重要な意味をもった「自治」の理念、また彼の活動を突き動かした「牧民官」の理念の内容が明らかにされる予定である。

(2)資料調査による成果

資料調査ないし事実認識として明らかにできたものとして、以下のものが挙げられる。これらは未刊のものではあるが、そのうち刊行を予定しているもの（すでに原稿が概ねまとまっているもの）は、著作権継承者の承諾も済んでおり、ほぼ用意が整っている。

まず、富山県射水郡長時代の南原に関する資料はほぼすべて確認した。この場合、当時の一次資料として、公文書類は火災ないし戦災等により失われていること、このため当時の詳細を知ることは極めて困難であることが確認できた（関係者のヒアリング等による）。しかし、更なる調査の過程で、当時の郷土新聞（特に『富山日報』）に、南原郡長の動静が詳しく紹介されていることが確認できた。この記事を辿ることで「牧民官」を志した南原の行動やそれを支えた思想に、ある程度まで迫ることが可能になる。このことを踏まえ、郡長時代の南原の動静を詳しくまとめた年譜・資料をまとめた。この原稿はほぼ完成しており、現在、発表媒体を検討している。

次に、同じく射水郡長時代の南原に関して、南原が郡内有力者に送った書簡も確認できた。この書簡は、一方では、郡長時代の南原の関心事を確認することで、上の年譜・資料の核心部分を裏づけることを可能にする。また他方では、両者の交流が戦後にも及んでいること、したがって当地（その関係者を含む）に対する南原の関心が任期中のものにとどまらなかったことを明らかにしている。当該資料も翻刻がほぼ済んでおり、2025 年夏に発表することが予定されている。

更に、東京都内でも国立国会図書館や成蹊学園史料館等で調査を進めた結果、官僚時代の南原に関する資料について、新たに幾つかのものを発見できた。このうち、特に当時の南原が執筆・公表した文書は、解題・補注等を付して、後日活字化する用意がある。また、本研究では、これらの調査を踏まえて新たな著作年表をまとめる予定であったが、上記の通り、未発見資料の存在が当初の予想を大きく上回っていたため、更なる調査のうえ、仕上げる予定としている。

香川県にて関連する資料の存否についても確認を進めた。ここでは、高校進学から欧州留学時代までを中心とする資料を確認できた。すなわち、戦前期（官僚時代）の南原の思想形成の前提にあるものを、更に詳しく調査、検討する手がかりを確認できた。これらの資料も、従来の南原研究では意識されてこなかったものである。ただし、この資料群は膨大な量に上るうえ、資料目録（リスト）は作成されていない。このため、目録作成の作業に始まる諸課題を具体的に確認できた。これらの調査、研究は、今後主題を移し、一定期間を設けて更に進めていく必要がある。

(3)比較思想史研究に関するもの

上の背景・目的・方法で述べた他の思想家と南原との比較研究は、現在、以下のような状況にある。いずれもコロナ禍による計画変更（上記）に伴い、当初の計画通りに進めることができず、特にその成果の発表にまで至ることができなかった。そこで、今後も研究を継続しながら、適宜、成果をとりまとめ、発表していく予定である。

第一に、本研究の背景にあった他の思想家（上記）については、各々の評伝的文献に依拠して、幼少期から官僚時代までの経験・出来事を取り上げ、南原との比較を一覧する図表を作成した。端的には、相互の間には一般に「教養主義（大正教養主義）」と呼ばれる世代の共通性が認められるが、他方、退官（学者への転身）の時期にはばらつきがある。後者には、信仰の問題や配属先での出来事等が関係している。これらのこと等から、個々の人物の精神形成ないし思想形成を跡づけていくことが南原との比較のうえでも今後の課題と見られる。

第二に、本研究の進捗の過程において新たに着目すべき人物として、前田多門・川西實三が浮上した。彼らはいずれも、官僚時代の南原が信頼を寄せていた人物であり、南原と同様、内務官僚として「牧民官」を理念とし郡長を経験した人物である。このことから、関連する資料（主に彼らの著作）を広く蒐集し、解析を重ねた。その結果、官僚時代の南原が語らなかった政治理念や「牧民官」の人物像といったことを知るうえでの手がかりをその資料に確認できた。これらは上記の南原研究（刊行予定）等で適宜取り上げていくが、同時に、引き続き、調査・解析を進め、彼らが担った独自の思想史的（または政治史的）潮流を明らかにする予定である。

なお、戦後改革の理念をめぐる問題にも通じる戦中期の南原の思想・哲学に関しては、主に彼の価値哲学との関連で、左右田喜一郎、蠟山政道、田邊元、難波田春夫、和辻哲郎、丸山眞男等との比較を進めた。これらは前掲拙著『南原繁　「戦争」経験の政治学』にまとめた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 川口雄一	４．巻 (1160)
２．論文標題 戦時期における和辻哲郎と南原繁の「共同体」論：宗教・人格・國體をめぐって	５．発行年 2020年
３．雑誌名 思想	６．最初と最後の頁 87-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川口雄一	４．巻 (1171)
２．論文標題 南原繁の政治哲学における「世界秩序」構想と「立憲」主義：戦前・戦中・戦後における「正義」概念の位相	５．発行年 2021年
３．雑誌名 思想	６．最初と最後の頁 89-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川口雄一	４．巻 60(1)
２．論文標題 南原繁の政治哲学：「価値並行論」および「理想主義的社会主義」の思想史的位置をめぐって（一）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 東洋学術研究	６．最初と最後の頁 88-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川口雄一	４．巻 60(2)
２．論文標題 南原繁の政治哲学：「価値並行論」および「理想主義的社会主義」の思想史的位置をめぐって（二）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 東洋学術研究	６．最初と最後の頁 98-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 川口雄一
２．発表標題 桑木厳翼における「文化主義」の政治思想：「大正デモクラシー」の思想史的コンテクストをめぐって
３．学会等名 南原繁研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 川口雄一
２．発表標題 南原繁の政治哲学における「正義」概念　：輪郭・内容からその形成過程へ
３．学会等名 日本政治学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 伊藤貴雄・川口雄一
２．発表標題 海外調査報告：ハイデルベルク、テュービンゲン、フライブルク、ベルリンを中心に
３．学会等名 新カント派研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 川口雄一
２．発表標題 南原繁の射水郡政（中間報告）
３．学会等名 南原繁研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 川口雄一
２．発表標題 第1次世界戦争期におけるB・ラッセルの政治哲学：南原繁の「正義」論の形成に関する予備的考察
３．学会等名 南原繁研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 川口雄一
２．発表標題 代日本における労働組合法案とその評価：内務官僚・南原繁の思想史的研究のために
３．学会等名 南原繁研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 川口雄一
２．発表標題 射水郡長時代の南原繁　再考：思想史的＝評伝的研究のための予備的整理
３．学会等名 南原繁研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 川口雄一
２．発表標題 南原繁の政治哲学：「価値並行論」および「理想主義的社会主義」の思想史的位置をめぐって
３．学会等名 新カント派研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 川口雄一
２．発表標題 内務官僚時代の南原繁の政治的活動と思想
３．学会等名 南原繁研究会
４．発表年 2024年

〔図書〕　計1件

１．著者名 川口雄一	４．発行年 2024年
２．出版社 北海道大学出版会	５．総ページ数 352
３．書名 南原繁　「戦争」経験の政治学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関